


 書評

Neil B. Sandson, M.D. 著, 上島国利, 樋口輝彦 監訳, 山下さおり, 尾鷲登志美, 佐藤真由美 訳

精神科薬物相互作用ハンドブック

下田和孝

薬物相互作用への関心の高まりに応える書

抗ウイルス薬であるソリブジンと代謝拮抗薬であるフルオロウラシル (5-FU) との薬物相互作用による重篤な副作用が問題となったのは 1993 年である。ソリブジンの代謝物であるプロモビニルウラシルが 5-FU の代謝酵素である dihydropyrimidine dehydrogenase を不可逆的に阻害する結果, 5-FU の血中濃度が上昇, 5-FU の副作用である白血球・血小板減少などの重篤な血液障害を惹起するというメカニズムである。わが国で開発されたソリブジンが市場から姿を消すことになったこの薬害事件や 1990 年代に cytochrome P450 (CYP) を中心とする薬物代謝酵素の解析が急速に進んだことを背景に, 薬物相互作用に関する関心は高まってきたといえる。

精神科領域では, 1999 年にわが国最初の選択的セロトニン再取込み阻害薬 (SSRI) としてフルボキサミン, 2000 年にはパロキセチンが臨床現場に導入された。これらの SSRI は従来の三環系抗うつ薬などとの副作用プロファイルの差異が認められるが, さらに薬物代謝酵素の阻害作用という点でも特徴があり, 薬物相互作用の知識は精神科薬物治療において必須であろうと思われる。

本書の主な部分は精神科, 内科, 神経内科, 外科・麻酔科, 婦人科・腫瘍科・皮膚科の 5 つのセクションにわたって, 計 175 の症例によって構成されている。本書の原題は “Drug-Drug Interaction Primer. A Compendium of Case Vignettes for Practicing Clinician” というものであり, psychiatry という言葉は出てこないが, ほとんどの症例で

向精神薬が絡んでおり, 『精神科薬物相互作用ハンドブック』という訳としたのであろうと推察される。これらの症例について, 薬物血中濃度の測定結果などにより, ささまざまな角度から検討し, 症例で認められた問題となるイベントの原因を明らかにしようと試みている。また諸検査が施行できなかった場合でも, 各薬物の特性からその発現機序を推論し, また, 症例ごとに参考文献を付している。

薬物相互作用を推測できるようにするためには, 薬物相互作用のパターンを学ぶことが必要であるが, 実際の症例を通してそのパターンを会得するのが近道であろう。本書に収載された各症例では, 薬物相互作用の 6 つのパターン (①基質となる薬物に阻害薬が追加投与された場合, ②阻害薬に対し基質が追加投与された場合, ③基質となる薬物に誘導物質が追加投与された場合, ④誘導物質に基質が追加投与された場合, ⑤阻害薬の中断, ⑥誘導物質の中断) のどれに当たるのかということも示されている。

また, 本書の巻末には向精神薬の各カテゴリーに分けた「向精神薬の相互作用—総論」, 各 CYP, uridine diphosphate glucuronosyltransferase (UGT), P 糖蛋白質の基質, 阻害薬などをまとめた「P450 一覧」「UGT または第二相 (グルクロン酸抱合) 表」「P 糖蛋白質関連の一覧表」が掲載されている。また薬剤名から引ける「薬物相互作用索引」も用意されている点も特筆すべきである。

(獨協医科大学精神神経医学)

●A5 424 頁 2010 定価 5,250 円 (本体 5,000 円 + 税) 医学書院